

る。

全四章から成る本書は、じつはフツンの出現までの寝所や寝具のあり方がどうであったかの問題に、多くの筆を費やしている。そこには種々興味深い叙述があるが、中でも、トコともユカともよむ「床」、そしてのちの「床の間」の問題に著者の関心が寄せられている。そしてそのことは、寝所・寝具の問題がそのまま家屋建築の展開の問題であり、生活史の中心的テーマであることを読者に理解させるであろう。

笠井昌昭（大学文学部教授）

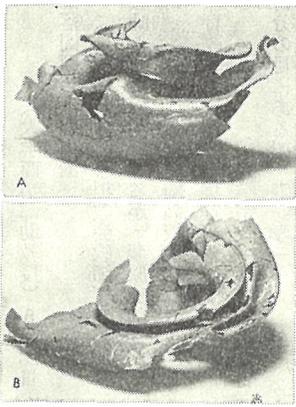
Suan Lala  
星 花  
pas d'atenu



### 同志社校地出土の埋蔵文化財 (6)

鈴木 重治

#### スエキヨオヘンオオガメ 須恵器窯変大甕



同志社田辺校地内「mamshigayasa」出土 奈良時代  
A 上・口径四三・五cm、下・口径四三cm  
B

同志社田辺校地にある遺跡のうち、一七六六年の分布調査によって確認された遺跡は多い。その中の一つが、「mamshigayasa」と呼ばれた遺跡である。一九八一年の発掘調査によって、奈良時代初頭の大量の須恵器が発見されている。

ここに示す二点の須恵器窯変大甕は、「mamshigayasa」の床面から、杯、鉢などとともに散在して検出されたものであり、

須恵器の編年の観察から八世紀初頭の年代が与えられている。

いちぢるしく変形している大甕の当初の形態は、体部の上位に最大の径がある丸底の甕で、外側に反りながら立ちあがる長目の頸と、口縁の端部が屈曲する点に特徴がある。また、頸部には四本単位の楯状施文具による波状文を、二段にめぐらしていたことが残存部からうかがうことができる。

内面の青海波、外面の格子状叩き痕は、部分的にナデ消されていて、口縁に残るナデの痕跡とともに器面の調整方法を示している。

変形の要因とその時期については、口径が四〇cm以上もある大甕でありながら、器壁の厚さが体部下半よりも、口縁や肩などの上部が厚いことからくる重量によって、焼成中にひずみを生み、胎土の弱さが加わって押しつぶされたものと考えられる。

なお、伴出した大量の杯を含めて、製品の供給先については、同志社校地の西側にある奈良時代の普賢寺が挙げられる。考古学的に、南山城出土の奈良時代初頭の基準資料として評価される。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）